

指定討論 1

国語科と他教科による言語能力形成

国語審議会による提言

野村 野村でございます。文化庁からまいりましたので、今のお話に沿いまして、まず、国語審議会の立場からご紹介をいたしまして、その後若干私の見解を述べたいと思います。

国語審議会では昭和 47 年 6 月に「国語の教育の振興について」という建議を文部大臣に提出しております。その中で基本的事項として三項を挙げております。それから引き続きまして学校教育に関する事項を 6 項目挙げています。そこでは、国語というものを人間活動の中核、思想・文化の基盤、そして教育の全体を貫く基本、というように捉えています。そして、学校の教育活動全体を通して、全教員によって国語の教育が行われなければならない、ということを説いております。そして、国語審議会は現在でもこの立場を受け継いでおりまして、昨年 11 月に出ました第 20 期の国語審議会の報告の中にもその文言が取り入れられております。

各教科の学習と言語能力の形成

次に各教科の学習と言語能力の形成ということですが、国語科のことばと他教科のことばについて考えるに当たって、児童・生徒の言語能力の形成というものを柱として、各教科がそれにどう関わっていくのか、また、形成過程にある言語能力が各教科の学習にどう関わっていくのか、ということを見構造的に見ていくべきだ、そういうことを目指すべきだ、と考えます。そのような大きな見通しを立ててみる必要があるかと思っております。そう考えた時に思い出したのが次の参考図(図)ですが、これは「国語科の全体像」ということで、都立教育研究所で 1985 年に出したもののの中に載っている図です。これは「言語人格の確立を目指す国語教育」ということで、「言語人格」とは「諸言語能力のバランスのとれた、最も望ましい言語的個性」と定義され、そういうものを人間が確立していく過程はこのように捉えられるのではないかと、という図です。これは国語科のみを範囲としているものですが、全教科を視野に入れて、ここでいう言語人格の形成というようなことを構造的に示すことができれば、と考えるわけです。

教科と教材文

それから次に教科書の教材の文章についていろいろな研究が今も紹介されましたけれども、このプロジェクトとして見通しを持った上で、実際教科書に当たってみることも必要だと思います。文章を見ていく前に、学習指導要領で例えば目標のところを見てみますと(資料) 社会科では「理解」ということばに関して、「社会生活についての理解」、「我が国の国土と歴史に対する理解」というようなことを、小学校での目標として挙げています。先ほど「歴史は解釈だ」というお話もありましたので、面白く伺いました。その辺のことは後々話し合いの中で出てくると面白いと思います。そして、理科では「自然の事物・現象についての理解」ということを挙げています。それに対して、国語科の目標の中には「国語を正確に理解し」とあります。小学校の指導書を見ますと、「国

語を正確に理解する能力」というのは、言語を正確に理解する能力と言語で表現された内容や事柄も正確に理解する能力、そのように捉えていることが分かります。いずれにしても、国語そのものの理解とか国語を通じた理解というところに特色があるわけです。

実際教科書の方を見てみる必要があるということで、若干検討してみたわけですが、中身については省略しますが、例えば、理科・社会が始まる小学校3年生の理科の教科書の文章を見てみますと（資料 ）、同時期に国語で学習するよりは易しくて、一文一文は断片的で、それぞれの文がいろいろな性格を持っているのです。児童をある現象についての理解へと導くために、いろいろな性格を持った文や図などが沢山使われている。そして、その中に理科的な用語もパラパラと出てくることになります。それに対して、理科的なことを扱った国語の説明文を見ますと、説明文として完結している、文章として完結している、ということだといふ文章としての性格が違ってきます（資料 ）、ですから理科の教科書の文章を見るときに、国語の教科書の文章と違うということで、良い、悪いを簡単には言えない、ということも言えると思います。

教科の学習と語彙

林四郎さんが、「理科や社会科の教科書は実に格好な言語教材である」ということで、「特に、語彙の教育においてその性格が強く、それは理科や社会科が、人間の基礎教養の方面別必要性によって構成される学科だからだ」、ということを例を挙げて説明しています。林さんの場合には例えば、「権利」について学ぶことは「権」という文字がいろいろなことばにつくということを勉強するいい機会になる、ということ述べているのですが、私は更に「権利」に関わって社会科における考え方、思考のあり方、というものを勉強することが国語の力には非常に重要な意味を持つと思っています。

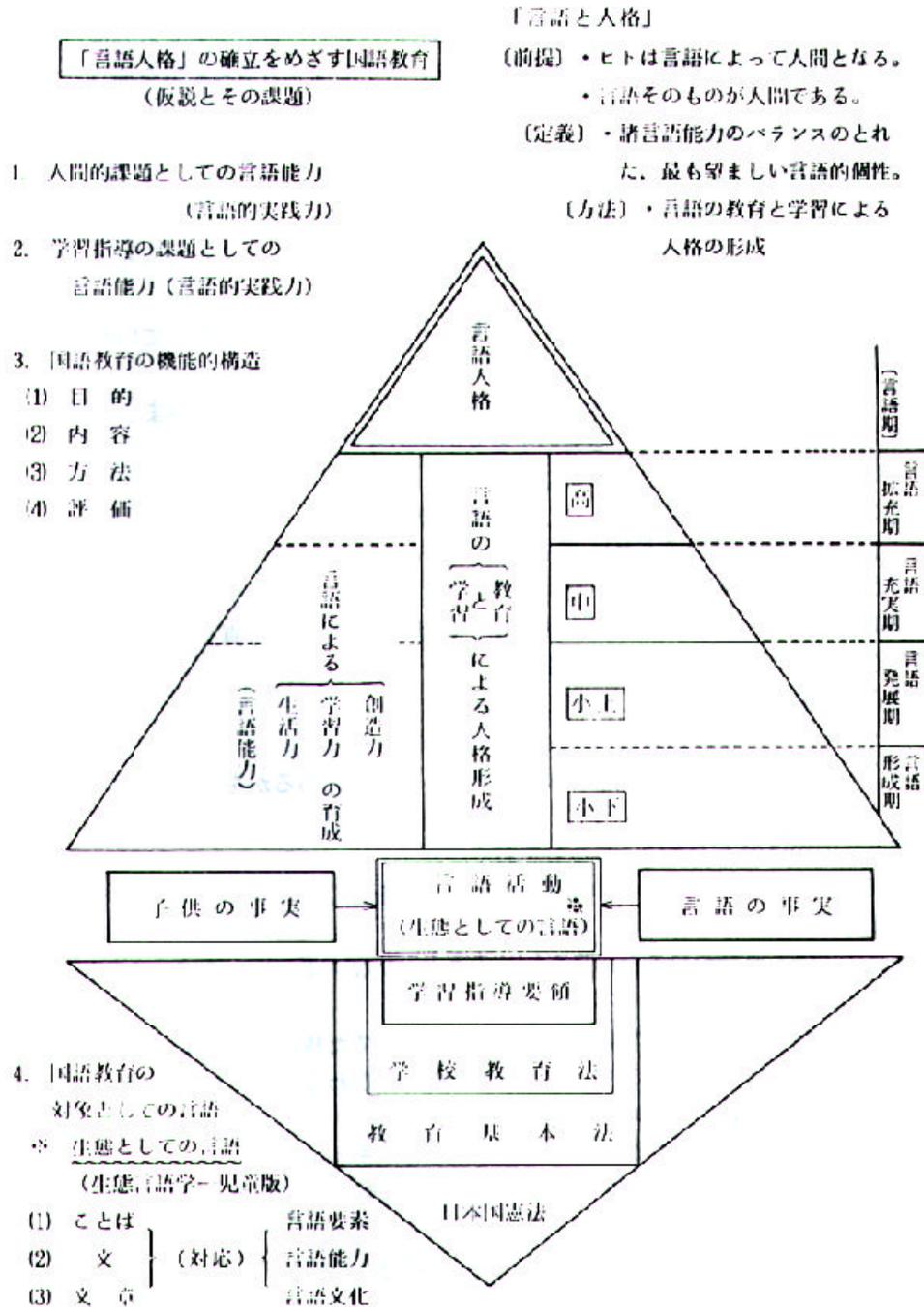
国立国語研究所では「中学校・高等学校の教科書の語彙調査」というのを行ないまして、その報告書の中で石綿敏雄さん、石井正彦さんが、理科・社会科に特有の語彙について論文をまとめています。そのようなものも非常に参考になるかと思います。

まとめますと、人間の語彙の形成という過程を見通して、その中で各教科がどう関わっていくのかを考えていくことが必要ではないか。国語科の教育内容は螺旋的に上昇する、というようなことがいわれますが、そういう捉え方についても、他教科などにおける能力形成と結びつけて大きく構造的に示せるのではないか、と考えています。以上です。

図 参考図

『小・中・高等学校・国語研究会 基礎理論を考える 収録』(1985.3 東京都立教育研究所教科研究部 国語研究室)より

国語科の全体像(仮案)



資料 「小学校学習指導要領」(平成元年3月)における国語・社会・理科の目標

国語：国語を正確に理解し適切に表現する能力を育てるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

社会：社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

理科：自然に親しみ、観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。

資料 東京書籍『新編新しい理科3』(平成8年度版) P56～59

3 - かげのできる場所はわかるか

日なたにあるもののかげは、いつも同じとこにできるでしょうか。

(絵の男の子のせりふ) 日なたの地面で温度をはかっている、あとで見に言ったら、日かげになっていたよ。

(絵の女の子のせりふ) 鉄ぼうのかげは、朝に見たときは、木のほうをむいていたのに…。

(絵のおじさん<理科はかせ>のせりふ) かげは、うごいていくのかな。

《しらべよう》かげのできる場所は、時間がたつとどうかわるか、しらべましょう。

(棒を立てて影に印を付けている男の子と女の子の写真)

ぼうのかげのところに、しるしをつける。

2～3時間後に、同じようにしるしをつける。

<注意>かげをしらべるものは、うごかさない。

かげのできる場所のかわりかたをしらべるくふう

(円錐形の標識、鉄棒、空き缶に棒を立てて固定したものの写真)

かげのむきは、時間がたつとかわります。

かげのむきが変わるのは、どうしてでしょうか。

(絵の男の子のせりふ) かげは太陽の反対がわにできるから……。

《しらべよう》かげのむきと、そのとき太陽がどちらのほうにあるかを、1日に2、3回しらべましょう。

ぼうのかげのところに、しるしをおく。

同時に、太陽があるほうの地面にも、しるしをおく。

2時間後、3時間後にもしらべる。

<注意>太陽を直せつ見ると、目をいためます。かならず、しゃ光プレートをつかって見ましょう。

(影の向きが変わっていく写真<校庭俯瞰2葉、立てた棒の拡大1葉>)

(絵の女の子のせりふ) 太陽がうごくから、かげのむきが変わるんだよね。

【やってみよう】(コラム)

かげのむきで時こくがかわる日時計をつくってみましょう。

1時間ごとに、ぼうのかげのむきにしるしと時こくをかき入れる。台はうごかさないでつかう。

(既製の日時計の写真と、作った日時計の絵)

資料 光村図書『国語三上 わかば』(平成8年度版)

ありの行列

大滝哲也

夏になると、庭のすみなどで、ありの行列をよく見かけます。その行列は、ありの巣から、えさのある所まで、ずっと続いています。ありは、ものがよく見えません。それなのに、なぜ、ありの行列ができるのでしょうか。

アメリカにウイルソンという学者がいます。この人は、つぎのようなじっけんをして、ありの様子をかんさつしました。

はじめに、ありの巣から少しはなれた所に、ひとつまみのさとうをおきました。しばらくすると、一ぴきのありが、そのさとうを見つけました。これは、えさをさがすために、外へ出ていたはたらきありです。ありは、やがて、巣に帰っていきました。すると、巣の中から、沢山のはたらきありが、つぎつぎと出てきました。そして、列を作って、さとうの所まで行きました。ふしぎなことに、その行列は、はじめのありが巣に帰るときに通った道すじから、外れてないのです。

つぎに、この道すじに大きな石をおいて、ありの行く手をさえぎってみました。すると、ありの行列は、石のむこうがわに道のつづきを見つけました。そして、さとうにむかって進んでいきました。そのうちに、ほかのありたちも、一ぴき二ぴきと道を見つけて歩きだしました。まただんだんに、ありの行列ができていきました。目的地に着くと、ありは、さとうのつづを持って、巣に帰って行きました。帰るときも、行列の道すじはかわりません。ありの行列は、さとうのかたまりがなくなるまでつづきました。

これらのかんさつから、ウイルソンは、はたらきありが、地面に何か道しるべになるものをつけておいたのではないかと考えました。

そこで、ウイルソンは、はたらきありの体の仕組みを、細かに研究してみました。すると、ありは、おしりの所から、とくべつのえきを出すことが分かりました。それは、においのある、じょうはつしやすいえきです。この研究から、ウイルソンは、ありの行列のできるわけを知ることができました。

はたらきありは、えさを見つけると、道しるべとして、地面にこのえきをつけながら帰るのです。ほかのはたらきありたちは、そのにおいをかいで、においにそって歩いていきます。そして、そのはたらきありたちも、えさを持って帰るときに、同じように、えきを地面につけながら歩くのです。そのため、えさが多いほど、においが強くなります。

このように、においをたどって、えさの所へ行ったり、巣に帰ったりするので、ありの行列ができるというわけです。

このえきのにおいは、ありのしゅるいによってちがうことも分かりました。それで、ちがったしゅるいのありの道しるべが交わっていても、けっしてまようことがなく、行列がつづいていくのです。